

研究タイトル：**バーナード・マラマッドの後期作品における人生の意義**



氏名：	松川 兼大 / Kenta MATSUKAWA	E-mail：	kentamtkw@cc.miyakonjo-nct.ac.jp
職名：	講師	学位：	修士(文学)
所属学会・協会：	熊本大学英文学会		
キーワード：	アメリカ文学、ユダヤ系アメリカ文学		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代アメリカ文学(小説)</li> <li>・英語</li> <li>・</li> </ul>		

研究内容：**バーナード・マラマッドの作品を中心とした現代アメリカ文学(小説)の研究**

アメリカのユダヤ系作家バーナード・マラマッド(Bernard Malamud, 1914-86)の作品において繰り返し描かれ、また彼の文学の本質的なテーマとなっている人生(life)というものが、後期の長編小説(『借家人』(The Tenants, 1971), 『ドゥービン氏の人生』(Dubin's Lives, 1979), 『神の恩寵』(God's Grace, 1982))ではどのような要素から成り立っているのかを研究するものです。初期から中期にかけてのマラマッドの長編小説の中心的テーマは、「新しい人生の追求」「贖罪と愛の獲得」と呼びうるものです。また善性を伝達する手段としてユダヤ性を用いる手法はマラマッド独特の手法となっています。

しかし、前期から中期にかけての彼の作風の変遷を記録し、また多少の実験性とともに自伝的要素に色濃くふれている5作目の長編小説『ファイデルマンの絵』(Pictures of Fidelman: An Exhibition, 1969)以降、そうしたテーマや文学的手法は少なからず変化していきます。中期から後期にかけて、マラマッドは作家としての自己の洞察というテーマに傾倒していきますが、それは彼の生い立ちやユダヤ人としての自意識と無縁ではありません。『借家人』以降の長編小説は一見ユダヤ的色彩がより濃密になり、また「新しい人生の追求」「贖罪と愛の獲得」というテーマからも逸脱しているように思えます。

とはいえ、そもそもユダヤ性とは何かということを定義したうえで、これらの作品における人生がそれ以前の作品における人生とどのように異なっているのか、またそこにどんな意義が見出されるのかについて論じたものの数は限られています。本研究は中期までと比較してあまり評価されてこなかった後期の作品が、マラマッド作品全体のなかでどのような位置を占めているのかを明らかにするものです。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	